

インタビュー「千人つか」 東浦さんに聞く

最終段階になって、東浦さんにご意見を伺う機会を得た。お忙しい方なのだが時間を作っていただき（平成22年（2010）2月11日）お宅にお伺いした。優しいけれどどこか毅然としたところがあり、少し緊張したが話題が豊富で人を飽きさせないほどお話し上手で、あっという間に2時間近くがたってしまった。伺った話は、河原節子さんのこと、栗林幸子さんの絵について、「わが町旭」の「千人塚」の文中で思うこと、感謝されることについてであった。



写真■東浦さん

河原節子さん（この時の代表者）

松山城北高等女学校より約150名が動員で来別し、現在の赤川三井住友銀行の横にあったアパートを宿舎にしておられた。その中で、前夜夜勤のため6月7日に残っていた15名の方々が空襲に合い、曾我静雄先生に率いられて先生の機転のきいた指導よ

ろしく、全員が無事であった。勿論寮は全焼した。（空襲の中をいかにうまく逃げおおせたか、当時を髣髴とさせるお話は長文になるので残念ながら割愛させていただきます。）

栗林幸子さんの絵 6月7日の空襲

淀川河川敷での死体処理の前の風景を見られて、死体はもっと凄いのだったと感慨深げに何度も何度もつぶやくように言われたのが、印象的だった。

「わがまち旭」の「千人塚」の文中『遺骨は土中に葬られ、いつしか雑草に埋もれて忘れられようとしていました。』のくだりは、堤防の工事が何度も繰り返され其の度に塚が移転し、ある一時はそのような状態になっていたとしても、決して忘れ去るというようなことはなかったとおっしゃられた。

すっかり激しくなった雨の中を歩きながら、今伺ってきた60年前の記憶とそれに連なるさまざまな出来事を思い起こし、よく生きることの難しさと素晴らしさを深く噛みしめていた。改めて東浦さんに「ありがとうございました」と心の中で呟きながら。

「東浦さんご一家に感謝の拍手」これは司会の高山さん（友人で、よき理解者・協力者）が突然言い出したことで、自分ではごく当たり前のことだと思った。

当時18歳の自分の友人たちは殆ど特攻などで死別したが、激しい空襲にも幸い命を永らえこうして暮せている。残ったものは当然このようにすべきと言うより、心からそうしたいと思っている。中学校で教わった、中国の項羽の「恥ず我、何の顔（カンバセ）あつてか父老に見（マミ）えん」の漢詩を書いて、こんな心境ですと、とても謙遜されていた。

公のものに個人的なことをあんまり書いてはと、しきりに言われた。お気持ちを十分お伝えますからと申し上げて、ようやくお暇をすることになった。



写真■千人塚の前で黙礼をする生徒

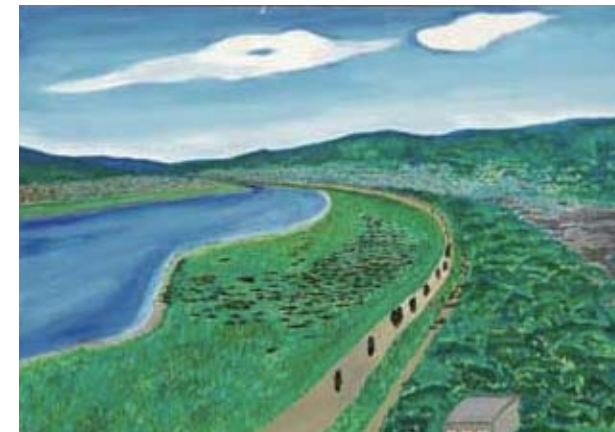
本誌を構成した「旭区今昔を知る会」では、まちあるきを開催し、多くの方に戦争当時の様子を伝えている。

絵で見る戦争の真実 資料提供：ピース大阪



絵■真弓百合子さんの絵

城北公園（淀川の堤防）の惨状。母の遺体を捜す少女



絵■栗林幸子さんの絵

淀川河川敷での死体処理の前の風景



絵■岡田加寿美さんの絵

犠牲者が次々に寝屋川方面に逃げてくる光景



絵■阪本馨さんの絵

淀川北岸堤防上で焼死体にガソリンをかけて焼いていた

我々がしてきた戦争とは何か？

昭和20年（1945）6月7日の大空襲の淀川河川敷の阿鼻叫喚地獄図を思わせる様相のあと、この世の末と思わせる絵である。

この日は朝から抜けるような青空であった。夏の空は一転暗黒の雲が垂れこみ、まわりは得も言われない静寂がつつんだ。

その後、土地の篤志家東浦栄二郎氏による遺体の処置（あちこちに散乱している死体を何カ所かに集めてガソリンをまき遺体を焼却）、その霊をなぐさめるため千人塚が建立され、毎年慰霊法要が連綿とつづいている。

この絵を見て思う。

「我々がしてきた戦争とは何か？」

人間が人間ではなくなるこの狂気。しかもこの絵は遠い戦場ではなく、つい身近近くの場所であったのである。しかし、まぎれもないこの現実を記憶にとどめている人が一体どれだけいるのだろうか。

【付記】

当時は戦争に関しての報道は、写真はおろか空襲に関しての現状の様子等はきびしく管制されており、只人々の個々の記憶によるものだけである。